

MJOT 会報

着任挨拶

国際交流基金ブダペスト事務所
日本語教育アドバイザー
栗原幸則

はじめまして、栗原幸則（くりはら ゆきのり）です。「日本語は楽しく、面白く」をモットーに教壇に立ってきました。勉強は何のためにするものですか。それは「感動」するためです。人生をより楽しむため感動するためにするものです。学習者にとって日本語は「日本に触れ感動できる」素晴らしい道具です。日本に興味をもって日本語に触れ、そしてより深く日本を感じてもらえればと思います。ハンガリーのみなさん共に学びませんか。教えることを通して、こちらも学び、世界の中の日本、東欧から見た日本がイメージできるから面白いですね。1987年より日本語教育の世界に入り、巷の日本語学校、大学等公的機関で教えてきました。今後も国内外に向けて経験と研究の場を求めていくつもりです。専門は談話における縮約表現です。1964年生まれの童年、血液型O型、2月生まれの体育会系です。どうぞよろしくお願いたします。

着任挨拶

国際交流基金ブダペスト事務所
日本語教育ジュニアアドバイザー
飯野令子

6月8日に国際交流基金ブダペスト事務所に着任いたしました、日本語教育ジュニア専門家

の飯野令子と申します。私は基金事務所の日本語講座の運営、授業担当を主な仕事にしています。ハンガリーの日本語学習者のためにできることは何かをいつも考えながらやっていきたいと思っています。

出身は富山県です。96年から日本語教師をしていますので、もう日本語教師暦は10年近くなりました。98年から2000年までは協力隊員として中国湖南省の大学に赴任しました。また、2000年から2002年までは協力隊シニア隊員として中国の大連市に赴任し、小学校・中学校で日本語教育を実施する学校を巡回したり、日本語教師の研修などを担当していました。帰国後は大学院に進学し、年少者日本語教育の研究室で勉強しました。

中国では、ずっと田舎にいましたので、仕事も生活も苦勞の連続でした。それに比べたら、ハンガリーはとてもすばらしいところだと思います。ただ、まだことばがよく話せないのも、不便を感じることも多いです。ハンガリー語は現在勉強中です。

これまで、ハンガリーにはまったく縁がなかったもので、仕事、生活、遊び、食事などいろいろな面で、先輩の皆さんに教えていただきたいことばかりです。これから、どうぞよろしくお願いたします。

国際交流基金ブダペスト事務所のホームページから、ハンガリーの日本語教育概要、日本学科紹介、日研生留学情報などが **PDF** ファイルで読めます。

<http://www.jfbp.org.hu/>

『運営委員からのメッセージ』

今回も大変遅くなりましたが、運営委員より 2004/2005 年度後期の簡単な MJOT 活動報告をいたします。

1. 2004/2005 年度後期活動報告

- 2月 セミナー4 (協力隊員日本語教師会と合同での卒業試験に関する情報交換)
- 3月 セミナー5 (セーカーチ・アンナ: 異文化コミュニケーションを授業にどう取り入れるか)
- 4月 語彙集 (ハンガリー語・日本語版) 完成。販売開始。
セミナー6 (若井誠二: 「和訳先渡し授業」について考える)
- 2月～ スピーチコンテスト準備

2. MJOT 会員などによる催し物

- 3月 ビジネスコミュニケーションに関するパネルディスカッション開催 (ブダペスト商科大学)
- 4月 「日本の日」開催 (ニーレジハーザ大学)
- 5月 ハンガリー日本語教育現状報告 (国際交流基金 Bp 事務所他)
富谷先生講演 (神奈川大学) 「日本語教師の専門性と教師としての成長」 (カーロリ大学)
- 7/8月 納涼会 (全4回・有志会員)
- 8月 第17回日本語教育連絡会議 (カーロリ大学)
- 9月 第10回ヨーロッパ日本語教師会シンポジウム

セミナー4 報告

日時: 2005年2月19日 (土)
 場所: セント・マルギット高校
 議題: 新しい卒業試験についての情報交換
 (内容は MJOT 会報 2005 春号参照)
 特記: 青年海外協力隊日本語教師会との合同
 開催

4. 上級試験で 60% をとったものの中で、大学日本学科に入学できなかった者もいる。
 (参考: 2005/2006 年度のカーロリ大学日本学科の合格者数は 45 名。うち 20 名弱が日本語初心者であった。)

セミナー5 報告

日時: 2005年3月18日 (金)
 場所: 国際交流基金ブダペスト事務所図書館
 議題: 異文化コミュニケーションを授業にどう取り入れるか。

①ねらい:
 日本語を学ぶハンガリー人母語話者にとって、異文化コミュニケーション問題になる点を調べる

②方法:
 I. ハンガリーで一般的に使用されている『みんなの日本語』の会話・練習問題を参考に、

卒業試験その後

1. 2005年5～6月に行われた新卒業試験第1回目の受験者数は、上級 34 名、中級 12 名。
2. 上級は 2 名不合格 (不合格の原因は 2 名とも作文) 中級は全員合格
3. 最終的に上級受験者 34 名のうち、何名が 60% を突破し国家中級資格試験を取得したかは MJOT 側は把握できていない。

- ①文化背景の違い
 - ②コミュニケーション方法の違い
 - ③直訳のできない単語
- の3点で意見交換

II. ①～③で出た点などを授業にどう取り入れるか意見交換

参加者から出た意見 (一部):

①文化背景の違い

- (1) 自己紹介
 - ▼自己紹介表現は暗記すべし
 - ▼「どうぞよろしく願います」は翻訳難
- (2) 気持ちを表す
 - ▼「お世話になります」と「お世話になりました」との違いを説明
- (3) 訪問
 - ▼「ほんの気持ちです」は状況提示をし暗記させる
 - ▼「ほんの気持ちです」や「つまらないものですが…」より「気に入ってもらえると嬉しいです」や「もしよかったら…」のほうが自然
 - ▼言葉より両手であげるといようなマナーやジェスチャーが大事
- (4) 別れなどの挨拶
 - ▼「頑張ってください」は文脈依存なので翻訳難、また目上には言わないことを説明すべし

②コミュニケーション方法の違い

- (1) あいづち
 - ▼「うんうん」がいつも「はい」とは限らない
 - ▼意見が違うとき、「表情に表さない」「Nem!」と言わない
 - ▼日本人が言うことは最後まで聞くように説明
- (2) 曖昧さ
 - ▼「すみません。金曜日はちょっと…」というように、直接的な言い方を避ける。
 - ▼「だめだ」という言葉を自分からは言わないように説明

③直訳のできない単語レベルの問題

- (1) ハンガリー語に対して意味が広いもの:

例) 国、国の、国へ

- (2) ハンガリー語に対して意味が狭いもの:
例) あげる
- (3) ハンガリー語に対して意味が強いもの:
例) 無理、無理な 約束
- (4) ハンガリー語に対して意味が違うもの:
例) ちょっと
- (5) ハンガリー語に対して背景が違うもの:
例) ドライブ、押入れ

★授業への取り組み

- ①学生にハンガリーと日本の習慣を比較してもらおう (例: 自己紹介、プレゼントを渡すとき)
- ②絵教材・ビデオ・ゲストなどを使って、文化背景・習慣を紹介する (例: 日本の家の構造、自己紹介のお辞儀、日本の行事)
- ③ロールプレイ・会話の丸暗記 (例: あいづち、確認、曖昧さ)
- ④ハンガリー語訳、説明を入れる (例: 単語レベルのコミュニケーションギャップの場合、習慣の違いで紹介だけでは足りないとき)

セミナー6報告

日時: 2005年4月22日 (金)

場所: カーロリ・ガーシュパール大学

議題: 「和訳先渡し授業」の紹介

1. 日本の中等教育機関英語教育の問題点

- 1) input 量が少ない
例) 中学校3年分の英語教科書の英語量ペーパーバッグ20ページ分
高校3年で読む英語量ペーパーバッグ1冊 (300ページ) に満たない

2) intake 量が少ない

- 例) 辞書を引きながら時間をかければ大体のことがわかる。でも「自分の考えをのべる。」「あるテーマについて議論する。」「日本についての質問に答える。」「英語のニュース

を聞いて概要をつかむ。…は難しい。

- 3) input, intake がないのに output をしようとしている。結局うまくいかず、結局 input のみに意識が集中

2. 和訳先渡し授業のコンセプト

- 1) 授業中に読む英語の量をふやそう。
- 2) 繰り返し読んで intake 量ふやそう。
- 3) そのためには、「解読」をやめて「読解」だ
- 4) 解読をやめるために、「和訳」を先に渡そう

3. 和訳先渡し授業の活動例

1) Input :

- ▼和訳を利用して英文内容をつかむ
- ▼教師が語、句、文を読み和訳を探させる。あるいはその逆
- ▼ワークシートの言葉の定義にあたる部分を探して下線を引く
- ▼日本語訳を参照しながら、でたらめに並ぶパラグラフを正しく並べ替えさせる。
- ▼各パートのタイトル選び
- ▼教師の質問の答えを探してそこに下線をひく
- ▼テープの質問を聞いて YES か NO かを選ぶ。

2) Intake :

- ▼リップシンク
- ▼テープを聞いて、息継ぎをしているところに斜線を引く
- ▼テープを聞いて穴埋め
- ▼シャドーイング
- ▼重要文を選ぶ→意見交換→教師の考えと比較
- ▼内容理解 (例) 男の人と女の人の違いを、色をわけてマーキング
- ▼ペアワーク YES、NO 質問

3) Output :

- ▼要約書き
- ▼各パラグラフを1文にまとめる
- ▼文に書いてあること、ないことからめて質疑応答

▼ロールプレイ・シナリオ作成 (作文)

- ▼文を絵にしてその絵をみながらの要約文書き
- ▼教師がキーワードを黒板に書き、それをもとに各グループが順番に要約文をつくる

4. テスト作成の際の注意点

- 1) 中等教育機関で行われる中間期末テストでは、基本的に一度読んだ英文を使う。だから実際には問題文をほとんど読まなくても答えが書けてしまう。でもテストでもできるだけ大量の英語を読ませるようにしたい。そして授業の活動とテストでの評価が結びつくようにしたい。
- 2) 授業の活動とテストが結びつかないと、生徒は授業内容を軽視する。つまり実授業の内容がテストに直結し、授業に参加してテスト勉強をすることが「英語で～ができるようになる。」ということにつながっていない。

4. テスト作成例

- ▼ディクテーション(家で10回読んで来い。→1回だけ聞く)
- ▼パラグラフの中から単語をいくつか抜いておき、それを元の位置に戻させる。
- ▼要約文並べ替え
- ▼自分で英問英答作成させる
- ▼結論部分を書かせる。

5. その他

- 1) このペースで授業を進めていくと、教科書があつという間に終わる。あまった時間で、違う教科書を読んだり、練習問題をやりする。
- 2) 調査の結果「和訳先渡し」をしても和訳の力は変わらない。語彙力も問題ない。という結果が出ている。

参考文献：金谷憲・高知県航行授業研究プロジェクトチーム(2004)「高校英語教育を変える和訳先渡し授業の試み」三省堂

第10回ヨーロッパ日本語教育教師会シンポジウム

相馬 笙子

2005年9月9日から11日まで3日間、第10回ヨーロッパ日本語教育シンポジウムがベルギーのルーヴァン・カトリック大学で開催された。ハンガリーからはセーカーチ・アンナさん、佐藤紀子さん、相馬笙子、安達いづみさん、中田晃子さんの5名が参加した。第1回大会は1996年にベルギーのルーヴァン・カトリック大学で12カ国22名の参加で行われた。そして今回第10回大会は奇しくも第1回大会の開かれた同じ場所で再び開催された。参加者は22カ国170名を超えた。セーカーチさん、佐藤紀子さんは第1回からの参加者で、開催者から「お帰りなさい。」と迎えられた。交流基金ブダペスト事務所古屋所長、栗原アドヴァイザーも全行程参加された。

テーマは「今までの十年、これからの十年」と、初心にかえて日本語教育を見直すという意義ある大会であった。

<講演>は第一日目、広島大学教授迫田久美子氏「第2言語習得研究の深さと広がり：知識を現場に生かす」。第二日目は桜美林大学教授平田オリザ氏の「対話の時代に向けて」。最終日はルーヴァン・カトリック大学のWilly Vande Walle 教授の「ある日本語教育者の断想」。

迫田氏は「これまでの日本語の第二言語習得研究を振り返り、習得研究が様々な学問領域とかかわっていることを理解し、習得研究から何が学べるのかを考えること」をねらいとして講演された。ふだん教室で行われている指導、学習の様々な方法の学問的意味を解き明かし、日本語習得の学問的背景を体系化しようとする講演であった。

平田オリザ氏はいかに今の時代の若者とコミュニケーションするかを基に、氏の考えられたコミュニケーショントレーニングを紹介された。コミュニケーションは日本語教育のなかでもよく取り上げられるテーマであり、

実際的なトレーニングは私たちに多くの示唆を与える物であった。

Willy Vande Wille 氏は専門分野は美術史。外国人学習者が美しいことばや豊かな表現を求める時、日本語教育における環境は必ずしも十分とは言えないという鋭い指摘を大変達者な日本語で話された。

<発表>は実に26人に及び、分野別の細かいテーマをはじめ、指導実践、交流報告、学習支援プログラム等多岐に渡り、中でも目立ったのはインターネット使用による学習支援の様々な試みが報告されたことである。セーカーチさんと佐藤紀子さんは発表分科会の司会をし、大会運営に協力した。

<フォーラム>では「CEF」、「読む」、「話す」の3つの部屋に別れ活発な論議が行われた。

<ワークショップ>は迫田久美子氏の『気づき』の重要性—データ分析から教材を考える—、平田オリザ氏の『コミュニケーション・ワークショップ』。二つのワークショップはそれぞれ45分ずつ2回に渡って行われ、内容に惹かれ参加者も多かった。

大会はアットホームな雰囲気終止した。街は美しい建造物に囲まれた落ち着いた佇まいを見せていた。年に1回のシンポジウムに集まってくる人々にとって、大会は得がたい交流の場でもある。ブダペスト大会への感謝のことばが多くの人から寄せられたことも嬉しいことであった。次回はお隣ウィーンで開催となる。ウィーンなら汽車で行ける。みなさんも参加されてはいかがですか。

第 17 回日本語教育連絡会議

若井誠二

8月3日・4日の両日、エゲル市役所大会議場で第17回日本語教育連絡会議が開かれました。

参加者は30名弱とあまり多くありませんでしたが、日本やヨーロッパ各国の日本語教育関係者が集まり、暑い議論を戦わせました。MJOTからは、ヒダシ・ユディット、モルナール・パール、佐藤節子、安達いづみ、若井ベルナデッテ、若井誠二が参加し、その他 ELTE やカーロリ・ガーシュパール大学の日本学科に所属する学生の姿もありました。

会議はエゲル市長および筑波大学名誉教授の林四郎先生の基調講演で始まり、その後17の発表がありました。(MJOTからは若井が発表しました。下に発表項目一覧を示します。)

来年の会議は、ハンガリー国境近くにあるスロベニアの小さい村で開催される予定です。

第17回日本語教育連絡会議

基調講演・発表題目一覧

- ・日本語の『心の文法』を求めて
- ・ワープロ演習から生まれた日本語講座ジャーナル『オラン通信』
- ・モンゴル語、朝鮮語、北京語話者と二言語話者の日本語学習ビリーフとキーボード誤入力
- ・行動の中の話しことば：データの文字化に関連するいくつかの問題点
- ・学習者自律を支える（学校）教師のビリーフ
- ・談話における聞き手と話し手のインターアクション
- ・分裂文の構造と機能からみた文法と談話の関わり
- ・日本語の使役形態素と自他の対応 —書き言葉の分析から文法指導へ—
- ・太平洋日本語教育機関の学習コンテンツ調査について
- ・先輩後輩関係に見られる言葉の使い分けに関して
- ・インターネットを活用した発表活動の報告

- ・海外における「日本事情」教育とその効果 —「わかりやすい発表」のための授業からの提言—
- ・教師は日本語教育実習で何を評価するのか —リュブリャーナ大学を例に—
- ・日本語を母語とする学生における「誤用」の問題
- ・中級学習者のための談話能力向上を目指した会話教育の試み
- ・日本語教育プログラム評価
- ・仮名文字の規則性に注目した仮名教材作成の試み
- ・プロジェクトワークにおける学習者の達成感

▼ 過去の日本語教育連絡会議の情報は、<http://home.tvnet.hu/~ocsiba/renrakukaigi/index.html> で見ることができます。(内容は今後変更される可能性があります。)

▼ 第17回日本語教育連絡会議の各発表レジюмеは若井のところにあります。ご希望の方には必要なレジюмеをコピーします。なお、発表論文集は来年3月ごろ発刊予定です。入手後一部を国際交流基金ブダペスト事務所に寄贈する予定です。

▼ 毎年3月頃に会議開催情報第一報が流されます。興味のある方は若井(szeidzsi@yahoo.co.jp)までご連絡ください。

役立ち情報満載！

SZAKU magazin

<http://www.szaku.hu>

オンライン **Japán ↔ Magyar** 辞書

<http://www.japanmagyarszotar.hu>

スピーチコンテストについて

2005年より、スピーチコンテストの企画運営がMJOTが中心に行われるようになりました。それに伴い、実行委員からの呼びかけでMJOTでメーリングリストやセミナーを利用して会員同士のやりとりがありました。

やりとりの対象となったのは以下の点です。

- | | |
|-------|-------|
| ①開催時期 | ②開催場所 |
| ③審査基準 | ④開催目的 |

①の開催時期ですが2004年同様11月に行うことになりました。また②の開催場所についても「大使館で発表する」ことが学習者・発表者にとって大きなモチベーションとなるという意見が出て、2005年も大使館で行うことになりました。

③の審査基準ですが「内容重視」の観点から、「内容に関する点数を2倍にする」こととなりました。また「質疑応答の採点に問題がある」との意見より、3問行われる質疑応答のうち、最初のYES/NO質問は採点せず、内容や主張に関する残りの2つの質問の点数枠をこれまでの半分の5点にすることが決まりました。尚、「客観的採点というのは難しいのだから、審査基準の整備とともに、スピーチの意義、スピーチコンテストの意義、スピーチを成立させる条件などについてもっと意見を交わしていく必要があります。」という意見も出されました。

④の目的としてはこれまで「底辺拡大（日本語学習人口を増やそう）」がうたわれていましたが、「スピーチコンテストが本当に日本語学習人口拡大に寄与しているのか。」という疑問が出されました。④に関しては各会員の意見もいろいろ出されましたが、今年度に関しては、この目的をひきつづき掲げ、参加部門にバリエーションを使うことで、これを達成しようということになりました。

運営委員の皆さん（キッシンさん、佐藤節子さん、吉瀬さん）の努力に感謝します。

納涼会「風鈴」

授業の問題点、アイデア、成功例、失敗例、卒業試験、などについて、「勉強会」という堅苦しい雰囲気ではなく、「おしゃべり」を目指した夏休み納涼会「風鈴」が、佐藤節子さん、吉瀬さんの呼びかけで、7月26日・8月9日・8月16日・8月23日の4回に渡り開かれました。この会には、MJOT会員のみではなく、日本語教師、日本語教師を目指す多くの方が参加しました。

第1回目は、現在の状況とこれからやりたいこと、2回目は①ゲームアイデア、②学生が参加したくなるような授業とは、③帰国子女への対応、3回目は漢字指導、4回目は①教師同士の交流、②日本の学生とハンガリーの学生の交流、③日本に住む先生との交流などについて楽しく意見交換がなされました。

今後も、会員の自由な発想のもと、こういう楽しい会がどんどんできるといいですね。

カーロリ・ガーシュパール大学日本学科では10月末より、さまざまな視点からのハンガリーを紹介するオープン・カレッジ・プログラムを開催いたします。皆様のご参加お待ちしております。（バックロク）

場所：カーロリ・ガーシュパール大学日本学科
361号教室 Budapest VIII. Ker, Reviczky u. 4/C

時間：土曜日、午前10時～午前11時半

対象：在ハンガリー邦人

プログラム

Dr. Farkas Ildikó 「歴史」 Dr. Gergely Attila 「社会」
Máté Zoltán 「言語」 Dr. Varrók Ilona 「文学」
Dr. Vihar Judit 「詩」 Wakai Seiji 「教育」

ハンガリー日本語教師会会報 2005年秋号 (2005年10月6日発行) 発行者：MJOT (担当：若井誠二)